★シカゴ通信③NO の声が政府と地方を動かす

シカゴの学校がコロナ禍のリモート学習に移行する少し前、公立高校(生徒約 1.500 人。9 月からの 4 年制）に入学して半年の息子が登校すると、広大な前庭に様々な人種の数百人の生徒たちが座り込んでいるのを見て驚いた。前日の全体集会で、トランプの国境の壁政策に反対して、国旗掲揚時に立上がらなかったメキシコ系の生徒二人に対し、業を煮やしたある体育教師が「自分の国へ帰れ（“Go back to your country !!”）」と言ったことに抗議するストライキだった。それを知った息子や同級生らは「かっこいい」と思ったらしい。学校は生徒たちの抗議行動を「権利」として認めて話し合いを重ね、問題の教師は翌週に解雇されたという。運用は未熟な面もあるが、公民権の確立されているアメリカらしい。

こういった、私にとっては健全な若者の感情の発露を担保する環境が公教育の場で見られるのは、比較的リベラルな民主党の強い都市部だからかもしれない。一方では安易にＱアノンや陰謀論を信じる若者の多い地域もあり、そのまま二大政党の分布に反映されて、先の大統領選では共和党候補への過去最高の得票となった。その一つであるフロリダ州がシカゴからの旅行制限のあるコロナ蔓延州だった昨年 12 月、タンパの野外フェスに出演するためにバンドで訪れた。空港からホテルへの車窓からは、家々の庭先に掲げられたトランプ支持のボードが目に付く。大統領選は終わったが不正を疑わない人たちだろう。冬でも暖かな海岸は、マスクを着けない何組もの若者のグループで賑わっていた。

連日ツイッターなどで根拠のない情報を垂れ流し、選挙結果を受け入れずダダをこね続けたトランプも、年明けの議事堂乱入・占拠事件後にはＱアノン一派と共にすべての SNS から閉め出され、ようやく信者の多くは離れていった。オバマ元大統領が「右翼系プロパガンダのネットワークのニュースしか観ない層と話すのは難しい」というように、メディア・リテラシーが求められるのはいうまでもない。今では SNS でトランプを持ち上げる人はほとんど見かけないし、あっても「いいね」などは僅かにしか付かない。

在任中は世界中を振り回したトランプだが、パンデミックでいよいよロックダウンになるとサクっと給付金（1 回目が$1.200 大人/$500 子供、2 回目は一人一律＄600）を各世帯(年収、約 1.000 万円以下)へ配る。そして失業者が増

え始め、私のようなフリーランスのミュージシャンにまで失業保険（州ごとの運営で、どこも最高支給額は週に$500未満）が適用されるようになると、連邦政府からの特別手当（Federal Pandemic Unemployment Compensation Program-FPUC）として、州の給付に$600/週を上乗せして19週間支給。FPUCの期限の切れた夏以降にも$300を更に6週間追加延長してくれた。私がトランプから2020年に受け取った失業手当は約145万円。イリノイ州からも毎週数百ドル支給されていたので、2回のトランプ一時金と合わせ、自宅滞在命令の長かった私たちにとっては大変助けになるものだった。緊急時で議会の協力があったとはいえ、何事も中流層には「自己責任の国」と半ば諦めていただけに、トランプの大判振る舞いと素早い決断には感心した。

年が明け、民主党有利となった議会構成を背景に、新大統領のバイデンは年末までだった失業給付期間を今年9月4日まで延長し、週$300上乗せのFPUCプログラムも続けることを決める。更に一人一律$1.400の一時給付と、確定申告の特別控除に一人$10.000（申告額によっては千ドル単位で還付）が議会を通ると、さすがに財源が心配になってきた。次第にコロナ禍の規制措置が緩められてくると、そこら中で建設ラッシュが始まっていて、気がつけば経済が好調になっている。私たちの限定ライブのチケットは売り切れ、チップの額はパンデミック前より明らかに多いことでも景気の良さを実感する。いつかは増税になるのだが、それが富裕層に対するものかが焦点になるだろう。あとは、武漢でもコンサートが予定されていて延期になった昨春の中国ツアーの再開待ちだが、バイデンになっても変らぬ米中摩擦によって、文化交流にも多少影響が出始めていると北京のプロデューサーは教えてくれた。外国人ミュージシャンへの就労VISA発給はまだ先で、アメリカのヘイトクライムで中国人の対米感情はますます悪化しているようだ。

それにしてもこれだけの財政出動は、経済界、地方議会、各組合、教育界、地域のコミュニティなどの声が政府に届いたからに違いない。アメリカでは人から忖度されることは少ない。メキシコ系高校生がトランプの移民政策に反対して座り込みストライキを成功させたのも、アジア系へのヘイトクライムがクローズアップされたのも、自らが声を上げたからであって、NOの意志を示さないとYESと捉えられてしまう。あるテレビ番組のオンエアーを観たら、ピアノは良く聴こえるのに私がカメラフレームに入っていなかった。次の収録のとき、ディレクターに「前回私が映ってなかったのは、アジア人差別じゃないよね？」と釘を刺すと、放映では画面一杯に私の躍動する姿が何度も登場していたことを付け加えておく。

有吉須美人　近代音楽のルーツと呼ばれるブルースの本場、シカゴを拠点にあ活動するピアニスト。2017 年にはアジア人として初めて「シカゴ・ブルースの殿堂」入りを果たした。